

里見八犬傳

第九輯

卷貳



~13
3416
40



曲亭翁手集
續出

八犬傳第九輯

柳川重信子
繪畫

淮南殘丹
鷄犬升天

文溪堂精刊



八犬傳第九輯自叙

在昔自室町氏走鹿諸侯割据不稟武斷
 於幕下大以駢吞小強以威服弱是以蝸
 角力戰無所不勉狼貪蠶食各不知厭當
 是之時田夫植矛而耕耘山婦掛弓而紡
 織人情都賢勇悍不厚於忠孝好名忘死
 屠城斫骨以為愉快且也每莅軍陳為勇

八犬傳九輯卷一

文溪堂藏

名以知于敵。改姓異名，欲不與衆同者，聞有之。所謂若鶉北，六花氏，吉見，八谷黨，里見，八犬士，尾子，七馬，九牛，十勇，女大内，十杉黨，上秋，十五山黨，朝倉，十八村黨，及山中，狼之，女野，中牛，助，不遑，故舉也。其名所載軍記事，實多，不詳，素是史闕，文歟，以類想像。此則暴虎憑河之勇，已矣。蓋戰國澆

漓士風，武勇有餘，而文學不足，徒倡異好，奇為俗如此。嗚呼，野哉，野哉，文武猶花實也。未見其花，惡得其實耶。故孔子曰：有文備者，必有武備。若夫其勇有餘，而一文不通，則其行侏離，譬如沐猴之戴冕，與彼楚人兇暴，又何異焉。由此思之，三綱無道，離世行，似獍梟者，雖有記傳實錄，而不足

見矣。是吾所以作八犬傳也。然而今之所傳非古之八犬士事也。非古之八犬士事猶且曰里見八犬士其故何也。野史用心假彼名而新其事於是乎善可以勸惡亦足懲果乎。君子尋文外隱微而解悟獎導深意婦幼代一日觀場而不覺春日秋夜之長云。因茲刊行書賈利市三倍不思作

者之閑與不閑一年徵月責所彫鏤五十有餘卷于此既而至第九輯意匠漸疲腹稿有限結局團圓且近抑童蒙等身之書於稗史所罕閱者儻指可復俟輯末之出焉。天保五年長月之吉題于著作堂東園菊花深處

蓑笠漁隱



董齋盛義書



南總里見八犬傳第九輯上套總目錄

①第九十二回 二犬復讐始自本輯第一卷

孤忠携鑣訟衆惡

第九十三回 復讐之二在本卷

隔川孝嗣演志

②第九十四回 復讐之三在第二卷

五十子城信乃留姓名

第九十五回 復讐之四尚在本卷

鼓盆悼定正知過

③第九十六回 復讐之五又在第三卷

御士仗義侯大敵

第九十七回 房總話說在本卷

兇賊無心而自訴積惡

④第九十八回 素藤發迹始自第四卷

宿賊巢強人免賊難

第九十九回 素藤發迹之二在本卷

遠親惑邪說鬧館山城

⑤第一百回 素藤發迹之三尚在第五卷

返覓異術美人彌奇

第一百一回 素藤發迹之四又在第六卷

逆將樹人公子喪衛

⑥第一百二回 里見侯征賊始自第六卷

義成分兵征逆賊

第一百三回 伏姬顯靈補破敗

伏姬顯靈補破敗

第一百四回 里見源老侯富山吊亡女

里見源老侯富山吊亡女

第九輯上套六卷總目錄終下套六卷共十二卷陸續刊行

八犬傳九輯卷一

四

文英堂藏



基田權頭
素藤

八百比丘尼
妙椿

まゝ波のよるへ乃
破ふかひのあれと
みるゑあやあは
あまねれこなひ
雷水



神童甫九歳
筋力捷成人
不羨甘羅敏
勇且唯得仁
著作堂

大江親兵衛
仁

平田金作
与冬

砥時願
業堂



花ののぬ
 みまかしの
 姫あやれ
 とたまの
 世あられお
 危 玄同

伏姫神灵
 公世のめ

東六郎辰相
 との辰相

八十八番 辰相

八十八番 辰相



創業尚義 守文弥賢
 富有房總 九世延延
 頼鳥齋散仙

里見義成朝臣
 さとみよしの

杉倉武者助
 直元

八十八番 辰相

八十八番 辰相

佐渡相川人石井夏海氏者予故人也。山海隔絕不相見。二十有餘年于此。客歲偶有鴻翅其書曰貴著八犬傳一書新奇絕妙世人所知我孤嶋亦年年流布雖老圃艸公樵夫鑛匠而未閱為羞如僕秉燭不知飽愛玩與米石一般因而為庶幾附驥之僥幸呈閱賤咏二三反歌三伏乞賜筆削見許載諸後輯則生平望足矣於戲舊故情願不可辭然若其長歌無餘楮可錄即取二三短歌以附載焉。歌曰家々々の看子やうのそくれ人夜をのほのそれ門のぬかそ

いぬのぬかそとぬかひし系なむむ筆ゆき綾子は若君かき

あつひちをそそるゝあとのまゐる不又きく宛めてたしとほり毛流渡人

右夏海氏所咏其第二歌則取今昔物語載白犬吞繭而鼻中吐絲故事云與本傳第七輯目錄欄內所圖蓋繭紙糊狗即同意蓑笠陳人又識

南總里見八犬傳第九輯卷之一

東都 曲亭主人編次

第九十二回 二犬路と分ちて一犬と資く

孤忠鑣小携りて衆悪を訟ふ

文明十五年癸卯の春正月二十一日の黎明小犬阪毛野胤智ハ多年の宿望時至りて父胤度の雙言りけ。籠山逸東太縁連が主君扇谷定正小説薦めて那小田原北條家密議の使と奉りそ副使と傳え。龜門鍋介既済越杉駱三一峯鯉崎悪四郎猛虎們のあつ大石憲実の家臣に仁田山晋五共侶小伴當許又從て五十子の城内より今朝首途の行列正小朝日の昇る時候武藏州品草と大木村の回る鈴茂林をまよける。渡打際を尋着て路傍の樹陰より立頭れ々名告かけて携りける鳥此甬鏡の先小杖と縁連が馬の曾頭打斃して走菟りつ笠電山の若堂四名と殺伏する。隙縁連短鎗を引提進退場と揃りて路方

なる毛野が敵多き止るもまた縁連を腕乱れて浅薄四五不處負多し茲と先途と戦
 ふるの儘の程縁連が後方馬と歩きたる電門既濟野崎猛虎這那兩個の副使の
 縁連と相距ると二町許りければ初よりして那隊不遇を縁連が伴當の慌ちも逃走の
 來て絆悠々と報へ既濟猛虎うち駭けて現剛才小鳥銃の响は迫り来りやあつらへ
 思ひ小原来艦見せしるれ兵毎續けと喚りて馬拍れ前後存一暮地馳着てとれん
 縁連が若黨四名へ身首處を異ふと馬共侶小して登時後れて従ひ來る。這副使の
 伴當の後の跟り立たつた縁連が奴僕們的迫り田の畔を指さして二位老爺那箇大隈
 野と名出りたる狼藉見へ那里不在と報るやち聴猛虎既濟勒を和え倍とるや原
 來件の艦松見へ尚立去ら程近り縁連數も兵毎と西聲劇く罵聲て馬を找
 め縁連と相資多く欲せられ去向へ陝水田の畔で一騎打る進退不便の安危と茲の
 料り難て左右もうち找るも然とて甲と踏渡らばも鋤も甘薄水不底見られぬ泥

深ければ人馬の脚へ立く誰何と死と躊躇とそれ無斬と縁連の也下鎗もさうも
 屢も野不敵と悩されて既の危光景を大家氣と向むる中猛虎怒り堪えりけん
 意を聲もあつて電門主も左右の路近りなると廣く其勢を遣不和殿の越
 杉仁田山と謀り合きて左右の路も多勢を俱くち寄せや咱們的獨中路も那裏の危窮成
 極へ先々といひも馬と閃くと兼放りて槍奴も持しる鎗と槍合り袂とそ幅三尺足
 らしめる水田の畔と筋の似く足信しと走りゆく後方不從若黨奴隸皆後れと極の美の二
 粒並に細路と喘をり不續けけ小程小三隊も越杉駱三仁田山晋五も絆の異変と知りて馬を
 飛へ來しければ既濟も亦馬を寄せ那方より癖者と捕捕る隊配も夜も急迫火速の
 進退駱三晋五異議もなき隊兵もあつらへて引られ左右の畔路西の方より電門既濟
 東の方へ越杉仁田山隊兵各三二十名先も找りしる前も起ッ鳥と共に駭く白路馬も
 未食難々朝西の風も着せしと翔りける這方より寄る大敵大阪萬夫の勇ありとも脱れぬ

志と思ふを勢いよりの機に既済一峯普五門の勢を東西より咄と嘯て直走の
 由くといふ。幾るに西も東も去向の畔に横耳なる稟塚の陰より思ひけるも見りと一度の突出
 毛鎗を既済一峯が馬の太腹裏と串れて這那共必死の一聲嘶たれども倒れども禁むらむら
 地の推倒して頭れも兩個の勇士三條路の一對する。蒲葎威の身甲は細鱗の臂縛筋鐵打る。肝
 衣を奇物造の両刀で瑞昂を跨へる。大及の鎗を引提て去向の畔に立塞。面魂は無敵の
 胆勇。西と東を聲高と合して噫物々。死奸黨が勢を肩む。助劍三味何処とくも路あるを信ある
 べと豫より思ふ。よって這西の稟塚陰に埋伏して大坂毛野が復讐言の外から成る異姓の弟。大
 田小文吾。悌順と喚ばれ。猛者を知らず。汝汝電門鍋介を。陣外奔の袖號。子煙の字わら。猜し
 身を起して刃を受えよ。右若口は罵れ。東も立す。一個の勇士も。若る鎗を横とて。汝越杉致
 松次。輾轉ひを殺し。要き。後多。武士も馬を。杖や。大坂毛野が。義兄弟。大川莊介。義任の。あり。逃

とも逃さず。找んと欲する。とも弥勒の世まで足とる。死處の。快く勝負を決せよ。とも勢は怯ま
 武勇の廣言。悔りなく。必も。身は傷れ。東西南北。一稍立向。既済一峯。東も馬と。打を。仁
 田山晋五。も只一人の敵と。思へ。微丈不得。若黨奴隷と。罵勵と。短兵急。小敷んと。左右の畔。左
 右の戦。以五十子方。い。勢といへ。尚義。勁勇。和漢。稀る。這。大士。鎗頭。誰。一個。當
 る。飛。東西。俱不足。と。乱と。持。う。前。射。る。迫。る。或。鎗。と。反。飛。され。胸。を。刺。れて。伏。ま。あ。或
 刀を打落されて。水田。滾。入。る。も。瞬。間。俯。累。り。て。死。ま。者。十。名。有。餘。の。它。も。刀。瘡。見。る。あ
 ければ。西も。東も。辟。易。して。逃。る。不。快。足。曳。の。山。の。木。葉。の。散。る。ど。海。邊。を。投。て。走。り。け。り。一
 程。西。の。頭。人。電。門。鍋。介。既。済。の。小。文。吾。と。刃。を。交。へ。て。小。雲。英。時。挑。ま。り。けれ。も。大。士。の。敵。も。足。る
 の。る。水。田。中。突。倒。され。て。起。も。揚。ら。命。を。殞。一。隊。兵。每。驚。怖。れ。皆。一。辟。敗。走。と。小。文
 五。口。不。逃。下。も。韓。盧。の。狐。狸。を。驅。る。似。く。自。心。も。吻。せ。趕。さ。け。然。び。又。東。の。頭。人。越。杉。駱。三。峯。は
 初。莊。介。小。馬。を。刺。れて。落。る。折。れ。臂。と。傷。り。七。殆。痛。楚。堪。ざ。り。と。辛。ま。て。身。を。起。し。仁。田。山。晋。五



八尺傳九郎卷二

文安堂



八尺傳九郎卷一

文安堂



一番も後れを合ふべからず。然らば、旅力三十許人敵して、船を馳せ、泉の親衛鐵門を破り、義
秀の伯仲を以て本事の違ふを器械合せて義経の少将を以て大阪毛野を以て三拂隊とて
撥撫する為、肉を餓す。鷗の雛猿と捉る不異る。其の投殺さんと以てけん、撤さば、那這と、西二回
持送りて矢聲を擡て投墜せし。毛野の宙を身と肉めりて、投れり。托地と蹴る。修煉の白打、猛
虎の右の腸骨撲折れて、躬所の痛癢、小霏時の堪む。云とをり、不仰反さる。身と轉して、仆れり。登
時、毛野の衆、楯を以て頭と撞んと、猛虎の頭、影を左の、勝へる程、由も、鶉崎の伴、當約、莫八
九名、後走、跟いて來り。這光景、驚愕、謀て、大家主、敵せり。と、あめり、路、険けれ、推並て、杖、持
由、先、立さる。一個の若黨、刀を見りと、板持て、走、蒐り、せり。程、毛野の性、まを、左の、猛虎を
あ、不、厭て、放、毛、右、ま、小石を、擡、取て、耶と、聲、擡て、托地と、擲り、寬、以、錯、毛、那、若、黨、の、眉、間、を、酷、擊
擡れて、叫び、果、死、せり。大家、それ、舌、を、掉、せ、杖、難、方、を、程、毛、野、の、透、る、臂、近、小石、を、食、り
復、敵、を、投、擡、お、驚、駭、立、さる。の、目、若、黨、も、亦、咽、喉、を、敵、を、傷、れ、鮮、血、を、吐、け、け、本、事、怕、る、伴

當門、懐、去、潑、と、逃、亡、て、影、を、見、え、け、り。毛、野、の、然、も、一、を、あ、る、を、冷、は、大、び、う、腰、を、探、り、短、刀、見
て、引、抜、け、及、復、さ、る。毛、野、の、擡、猛、虎、を、影、と、又、引、柄、を、頭、擡、研、て、刀、を、拭、以、腰、帶、で、首、級、を、引、提、て
身、を、起、て、後、方、小、石、を、縁、連、の、折、り、を、我、復、り、を、驚、駭、を、腰、刀、を、見、り、と、拔、け、立、あ、る。聲
と、あ、り、去、背、後、より、兩、段、あ、る、と、と、敵、を、刀、の、光、り、小、身、を、反、毛、野、の、持、持、猛、虎、の、頭、を、楚、と、受、任
れ、る。肩、も、敵、を、又、振、抗、る。刀、小、先、を、首、級、の、敵、眼、縁、連、の、赤、眼、を、打、れ、叫、苦、を、う、り、小、石、を、食、り、程
も、あ、る。後、抜、け、敵、も、毛、野、を、卷、火、銳、短、刀、を、敵、に、て、叫、び、あ、る。敵、主、れ、る。縁、連、が、頭、顛、撲、地
と、滾、落、て、軀、も、共、小、石、を、け、り。の、時、猛、虎、が、伴、當、の、皆、を、う、り、逃、亡、せ、り。更、不、近、て、敵、も、毛、野、の
除、短、刀、の、鮮、血、を、拭、以、鞋、を、收、め、又、猛、虎、と、組、方、折、指、を、刀、を、合、抗、て、あ、も、推、拭、以、背、帶、で、飲、然、と
去、て、四、下、を、う、り、小、這、田、の、畔、大、石、を、榛、樹、の、伐、株、小、柄、枝、の、脩、く、あ、る。毛、野、の、兎、兎、竟、と、獨、言、先、懷、より
會、終、亡、父、の、法、彌、を、寫、着、る。小、卷、幅、を、う、り、戴、推、開、て、伴、の、榛、枝、を、掛、て、然、而、冤、家、縁
連、の、首、級、を、懸、て、引、提、さ、る。毛、野、の、水、田、の、氷、を、擡、て、塗、れ、鮮、血、を、洗、流、し、那、伐、株、を、ち、載、り、親、小

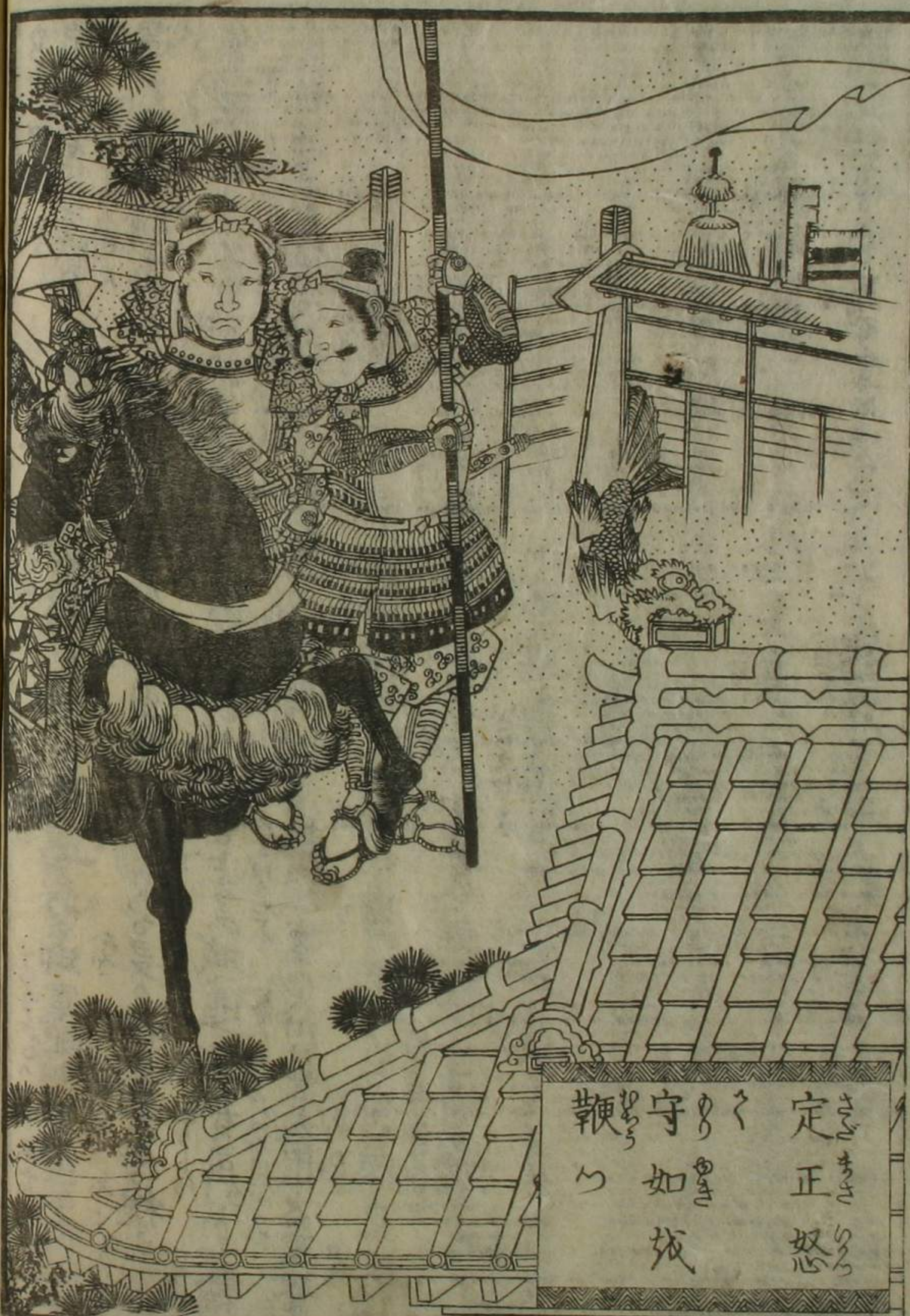
たけね 向て念まるや。往る寛正六年冬十一月馬加常武が奸計で這縁連を殺されぬ。先考不滅の
 霊あふ今這血食を御食多常武一家の爲比血の毒を復たせしむる。龍山縁連の名を復たす
 埋めし。今に至りて十七年天運を登く循環して死を復たせしむる。願ふ義母 楢原の嫡室をば
 兄 栗飯原益之助を 比目共侶小影向とて這血食を觀て生前の恨を養育と先大人と存一天堂を生
 ぶ。弟玉枕等たり。皆共侶小影向とて這血食を觀て生前の恨を養育と先大人と存一天堂を生
 ぶ。あひひの弥陀佛弥陀佛と唱へ。更亦実母 調布の法師を念と復讐言の支任とて訴る。孝
 子の誠心流れる隈る。哀歎交吐を涙と拂ひもあま統四維錦綉たるを忘れて姑且を合
 當ものもと釋さるけり。浩処不楚然と近く人の足响を毛野の急おんれは是則別人
 らる。二天士莊介小文吾之登時毛野の邊へ小巻幅を巻收めて身を起こり笑ひの寄る
 邊へと所迎へておも思ひかけゆり大田主大川主も俱々怪我のり。飲什磨いふと縁より
 けの復讐言を知れけん。御向の寛家の方人們が東西二條の畔路より縁連を援け来り折和
 君們中途に埋伏して遮り留めて敷果しる。残黨を趕れる。その支の爲体と過目敷をされぬ。

某も亦縁連們と闘戦の最中よりけられ討つる。三三三支向ふ道運るといふ。既和君們的補助
 ともて三方より敵を受て寛家縁連が爲助劍を。鯉崎悪四郎猛虎と飲喚做を武士の槍法
 力量はたの敵もあつた。とそをも漏さ敷果し。終小縁連の首級を獲り。その折和の
 伴當們の後走れ未だも。丹奴們の亦某が投石を敷れ駭怖れて一個も送る。逃亡る。余後近
 つ敵もあつた。寛家の首級と亡父の向を。果折和君們這里から来きて疑いと釋く
 ともて。宿因錯て料も。決けられけの便宜の神の示現ふひ。飲佛の利益をける。飲今更
 謝する所を知らぬか。も意外の再會も。飲小喜び。うち思ひ。方一期の事。何支り亦あれ
 優ま。感嘆の外に。誠の珍重とて。諄復し。飲を演れ。小文吾之莊介。合笑を。點頭で
 あり。如右の理り。疑るも亦所以あり。既和殿を見られ。我々の那縁連も助劍せんと。競い
 本。敵と東西不速留り。那五十子の副使も。一。雷門既濟越杉一峯と飲喚做を。這那
 二名と敷捕りて。逃る。仁田山晋五們を透さ。連り不趕。蒐る。晋五の騎馬の伴當們も皆



十九

〇〇〇



鞭守りく 定さき
 如 正さき
 城 怒り

言路塞りてその昔悪と云々と稟き由ゆら心あるも深き淵に臨むが如く薄氷
 氷と踏み似て戦々兢々の思ひ已がかりし當家の御武運を不慮に縁連ハ那身の仇る
 大阪毛野胤智とやらハ敷され又縁連の悪と資けし猛虎既濟一峯們ハ俱小命と殞
 是より那和議整へて人の下風立あつた當家の幸ひするも願ふ鼻祖の大神
 武峯の神助より秋蟹目の前の初なる湯嶋の神の加護ありて那奸佞を鋤れ
 高禄を留めて彼らハ大阪毛野胤智の地方を遠く去るに在るも孝義を譽て城内より召
 迎へ高禄を留めて彼らハ他の君の寛仁大度と感て忠義を盡すべし然る縁連猛虎
 士卒幾十名と喪ひふとも損あはれとあつた益ありての議を容れぬかといひせ
 も果に定正の怒れる敵耳と苛立ちやれ守如推參之縁山縁連ハ那大阪奴ハ仇も
 せ復讐言の折あつた我正使とて小原原北條氏遣を折這五十子より程遠か
 らぬ鈴の茂林に埋伏して獨縁連のくるに副使并伴當們ハ大々去るに敵を果せし

阿容々々と七捕捕らざる當家の威風衰へりて是より隣國侮れん憶ふ汝ハ縁連が
 功と増む小あらん然るも思ひ始より何ぞ一言も諫ざる目今那死之咎及びてその昔
 悪とのあまるとぞ叨他人の武勇と稱へる君と不まる不義失敬其首退去と敦圍ハ暴
 持る鞭と振抗て西三番壁ハ守如ハ額破れて鮮血不面と浸せし令る鑢と
 放さぬめび殺せし勵てさ情君の御短慮微臣日屬縁連の奸佞邪智を知
 るといふもその非とさむ難ハ御信用深きより遂て他中られて甲斐をりんと思へん
 今今朝ハ幸ひ縁連ハ敷きて忠臣これを歎くも君ハ感て醒させあり他
 與ハ大阪毛野胤智をみづる捕捕せし遂に千金の死身とされて今危を臨むハ林が
 まらざるもその那大阪胤智ハ和漢ハ稀る是世の英雄也異姓の兄弟數人あり影の
 形ハ從小如く相資ると豫より听するとのゆに然るも其勢カハあつた侮りて強敵あり
 その美を知り召れね一時の怒り不任ありて連の我を折衷の難義及んば是亦

知るべきは微臣の職もさるも君御名代とて士卒を招て。多々那里小赴て大阪毛野們
 が猶在る。詭意を計て俱く去るべし。若又那里とて去るを。往方知れざる。速く士卒と分
 りて隈もく驅渉獵りて。遇せしむるも。這義と許さぬか。と涙と流し詞を
 盡て。肝胆を吐く。孤忠の諫言。定正の之耳。逆ひて堪ぬ。怒り小聲と惜ま。命を守如要。要
 諄言の折所。听く暇も。汝とて死小胆見。那大阪們の助劍。あれ。定正三軍。小將とて。うち
 向ふも。捷々かかん。と侮り思。不致。奇怪。然も。不更を。陪。本。事。と。せん。覚。期。と。せ。よ。
 と罵り。さ。忽地。小。鎧。を。抗。て。礮。と。蹴。る。憐。む。守。如。の。曾。と。蹴。ら。れ。何。と。さ。り。死。活。の
 知。ま。兵。兵。で。殿。居。小。控。と。俯。さ。け。定。正。を。も。く。く。ま。兵。毎。續。け。と。駛。馬。小。鞭。を。鳴
 ら。々。突。然。と。西。の。城。門。より。走。り。來。れ。從。士。卒。三。百。名。皆。後。れ。と。身。を。起。し。粵。小。脱
 と。勢。を。張。春。の。朝。易。の。高。瞭。ら。ち。出。て。え。ん。寄。る。清。海。在。不。傷。の。友。と。て。竹。の。雀。の。家。の
 花。號。軍。旗。蹄。幟。色。を。え。て。競。入。馬。の。塵。埃。烟。空。を。霞。段。めて。い。と。た。け。り。

第九十二回 轎小坐守如主と救ふ
 川を隔々孝嗣志と演ぶ

再説扇谷定正。河鯉守如の諫を用ひ。怒り。鎧を揚て。守如と蹴。小。西の城門より走
 らる。馬の前。後。相。從。ふ。の。隊。の。主。卒。三。百。餘。名。旗。と。杖。の。器。械。と。見。め。り。て。操。小。操。を。い。て。素
 上の。勢。の。癖。を。見。敵。の。勇。士。あ。ま。あ。れ。も。練。三。個。過。ぎ。と。思。ハ。聊。小。心。せ。ば。先。に。争。ひ。隊。伊。を。乱
 れ。と。高。聲。ふ。ら。ち。浦。曲。迴。小。幾。町。欽。地。方。易。れ。品。草。も。後。ハ。驛。路。も。多。鈴。の。茂。林。邊。近
 つ。程。前。軍。の。敏。速。に。樹。立。の。内。伏。一。隊。の。敵。を。忽。地。揚。る。因。の。聲。研。小。喚。て。野。頭。れ。お。る
 其。隊。の。軍。勢。但。見。る。主。卒。三。四。十。名。去。回。の。路。横。断。る。小。敵。も。れ。も。噪。を。乱。れ。深。山。に。半。隼。鶻
 燕。雀。と。搏。つ。勢。あり。そ。が。中。の。頭。領。黑。草。威。の。身。甲。小。細。鋒。の。掩。膊。士。頭。の。脛。衣。を。長。は。向
 乃。跨。へ。る。對。の。武。具。勇。は。も。九。尺。柄。雙。枝。槍。と。兩。の。合。ひ。る。回。魂。凜。々。と。四。下。に。拂。ふ。風。も
 對。の。兩。聲。高。く。來。れる。を。隊。の。大。將。の。扇。谷。の。管。領。定。正。往。る。丁。酉。の。夏。四月。十三。日。池。袋。合。戦

不汝があふ滅亡せしめれ。煉馬平左衛門尉倍盛主の舊臣多。大山道即忠與がけの復讐の第一陣。這個異姓の義兄弟大飼現八信道大村大角礼儀。這里不候し。知るは。找し。勝負と決せし。指招に冷笑ひて大路も陝しと立す。定正れをうめて。原來這地狼籍見の御縁連。れを。敵も果し。那大阪毛野も。その三名の。豊嶋煉馬の殘黨も。亦那隊も存る。遮莫看る。が。長の知る鳥合の小敵。躬方の。勢。比。看算。も。足。推捕。稠。敷。と。連。り。不。采。幣。うち。揮。て。躬。方。の。將。大。將。下。知。從。先。鋒。の。頭。人。地。上。織。平。末。廣。仁。本。太。一。百。餘。個。の。雜。兵。を。魚。鱗。小。備。啞。嘯。て。三。王。王。不。敵。ん。と。登。時。現。大。角。の。躬。方。に。信。さ。る。と。兵。每。中。割。り。を。聲。と。り。共。受。て。一。人。も。と。西。之。人。當。ら。ば。あ。り。の。入。乱。れ。戰。ひ。小。程。不。現。八。地。上。織。平。と。鎧。と。交。え。又。大。角。の。末。廣。仁。本。太。と。雌。雄。と。爭。ふ。戰。ひ。も。定。正。の。後。陣。の。不。敵。の。伏。勢。猛。起。り。先。不。技。一。個。の。大。將。是。其。る。打。扮。を。紺。の。糸。の。甲。の。火。秋。打。る。曹。の。緒。と。締。四。尺。三。寸。の。り。大。刀。踏。八。四。抽。る。中。黒。の。征。前。の。貫。

白井之野
 井作
 古記の載
 是所異
 同あり

馳。做。一。本。繁。藤。の。口。其。中。に。揮。持。て。挑。花。馬。の。太。逞。に。雲。珠。鞍。措。て。乘。る。天。地。の。响。聲。も。大。く。響。け。り。管。領。上。杉。定。正。先。亡。煉。馬。の。一。老。臣。大。山。道。策。々。嬌。勇。あ。る。大。山。道。即。忠。與。あ。る。曩。白。井。の。狙。撃。の。巨。目。助。友。奈。裏。と。書。り。て。我。計。畧。終。れ。三。年。の。憤。懷。け。不。至。れ。り。刃。と。受。と。罵。り。て。隊。勢。を。找。せ。攻。立。れ。定。正。酷。く。驚。び。て。原。來。敵。の。伏。勢。も。快。一。方。と。敵。を。破。り。退。か。せ。と。喚。林。の。聲。も。先。不。扇。合。の。士。卒。一。驚。慌。て。退。く。欲。き。後。不。道。節。の。勁。敵。あ。る。又。進。ん。と。欲。き。前。大。飼。大。村。の。兩。雄。あ。る。且。左。は。是。勝。た。る。也。と。言。ふ。右。の。樹。木。隈。も。さ。げ。れ。路。陝。く。進。退。便。多。前。後。の。敵。の。探。立。り。を。敷。る。も。の。を。言。う。け。是。より。先。地。上。織。平。大。飼。現。八。と。鎧。と。合。し。小。雲。時。挑。戰。し。腕。を。交。え。既。不。淺。疾。の。肩。ひ。か。逃。入。り。不。透。向。も。あ。る。折。ら。敵。の。伏。兵。の。後。方。も。起。り。後。陣。も。共。不。乱。れ。織。平。の。胆。落。て。引。外。と。せ。程。不。現。八。咽。喉。刺。れ。仰。天。死。せ。り。又。大。角。と。鎧。と。交。え。未。廣。仁。本。太。の。躬。方。猛。可。敗。走。り。地。上。織。平。も。敷。き。れ。敷。驚。怕。れ。逃。ん。と。せ。大。角。透。き。鎧。伏。せ。て。首。雜。兵。不。捕。せ。り。小。程。不。定。正。の。後。敵。不。攻。敗。れ。既。不。危。む。け。有。係。主。の。命。代。之。死。き。兵。多。あ。る。僅。一。方。を。殺。披。て。相。從。近。習。八。九。



現八大角雙で大敵と破る
 品草の原小
 道節定正と
 赶ふ

第八回
定正の
名馬の
左右の
成る
品草の
走る
程の
道節の
只一騎
衆の
先の
馬を
飛して
其處
地を
趕る
鬼を
追ふ

名馬の左右の成る品草の走る程の道節の只一騎衆の先の馬を飛して其處地を趕る鬼を追ふ
聲あり立て管領定正達も敵の背ををるるに復た忠與の怨の征前を受てそのや辰す
よの喉拭て公前給近くる隨ふらと満月の似く響固めて矢聲尖く標と射る修煉差も定正の
不字に射捲たる管領衆共伴の倫緒之弗と断離れて塵地上に墜るける定正吐唾と胸を渡しく
扇小俯し其首をもとて逃走る道節は不遣り馬小拍れ埋るる勢ひ免るるもわさ
長定正の近臣西名目足非多路踏留りて齊一防戦の道節は物も其左きと挾る右きと抜内
りて近く敵と伏し速に馬の蹄を捲て疾蹴返蹂躪する縦横音の勇士の突戦獅子奮震の
勢ひ虎彪も用ゑる然も四個の近習の母悍く所々の思も似度と失ひて或は頭懸
敷も落され或は深瘡の堪むし七の侍もあつた解馬蹄も漫たる多程不定正の虎口を渡
延て稍品草の原まで来るは休題更説落結與之主有種へ御宗道節論され那隊加ふるは戦
飯と炊と與ふと留置れ四五名の雑兵們共伴の高嶺の浦の松木在り既しく定正はさう隊兵許す

品草の原の方馬と走る軍装と看ると分明るけふ那里の戦ひも敗れて敵乱走を
となくと雑兵の逃るる慌く五十名は走るあり有種迫るをそと腹裏思ふ料も優る
けの戦ひ定正みづ城より出で躬方の勝利とぞ大山王の誠ありと我安然と這船と成ると這奴
們を敷もどるあつた武士も甲斐もあつた似たりあつた敵一人もも擇討敵を捕て我も亦亡君も忘れ
致もなれと尋思とあつた悠々と雑兵并小戦ひと好む船主們的意衷を示し武器着せて情々地陸
登るその隊の兵卒七八名程は樹蔭に立願れて落る敵と候々在り悠るべし知りて扇合定
正僅小残る近習と俱して品草の原と走る程も去向も亦復安くと頭れ一隊の敵も先我より
個の頭人老鎗節間と合組して耳と串と聲高き來るは是定正歎着る鎧の威毛も兼た馬
更我より知ぬ先君豊嶋勘解由左衛門尉信盛朝臣の奉為不死の雪入覚期とせと喚くら逼近
つて面もゆきと鬼れ定正主従驚慌て敢亦勝負と好む且戦ひ且走ると有種の隊兵を烈く
找も息も養れど痛瘡を肩て走難る敵面を名撃を捕り候れども定正僅小残る鬼れ

たるまで あり 初め かつ 後方 迫り 相従ふ 近習 門 大なる 路 敵 され
 高嶽 落ち 落て 来る 初め 息 多し 後方 迫り 相従ふ 近習 門 大なる 路 敵 され
 二階堂 高四郎 三浦 三吉 郎 喚 喚 する 只 這 両 個 の 近 臣 の 死 する こと なる 他 們 の 數 人 所 痛 傷
 肩 へ 全身 鮮 血 淋漓 定 正 憶 念 嗟 嘆 して 御 家 我 一 身 恨 みの 堪 ぬ 哀 れ 好 夢 河 鯉 權 佐
 守 如 諫 聴 け ず 期 許 賢 今 百 遍 悔 甲 斐 々 快 五 十 子 の 城 中 還 り 寄 寄 敵 防 心 ぞ
 又 九 町 走 り 五 十 子 の 城 の 黒 烟 空 焦 兵 火 既 燃 主 従 足 又 驚 び 那 竹 鹿 ぞ
 呆 呆 馬 駐 留 浩 然 現 大 角 敵 大 將 敵 捕 へ 猛 卒 十 餘 人 相 俱 捷 徑 經 て
 此 處 目 今 定 正 從 二 名 停 立 推 捕 網 敵 定 正 必 死 の 窮 厄 免 れ ぬ 事 あり
 二階堂 高四郎 三浦 三吉 共 保 定 正 馬 前 立 塞 敵 柱 現 大 角 敵 數 人 介 程 定 正
 近 着 敵 雜 兵 殺 拂 路 傍 的 阜 馳 涉 腹 斫 ら 覺 期 折 忽 然 二 隊 兵 軍 兵
 阜 後 走 出 勢 千 餘 人 新 隊 似 珠 亦 訝 一 挺 轎 子 雜 兵
 名 阜 先 小 幡 持 七 河 鯉 權 佐 守 如 大 守 寫 け 定 正 來 敵 原 來 敵 原 來 敵

り 我 生 不 勝 的 阜 馬 乘 下 定 正 一 騎 守 如 救 喚 呼 勢 中 人 馳
 登 時 現 大 角 三 浦 三 階 堂 敵 捕 又 定 正 趕 敵 援 兵 來 主 君 守
 護 中 小 四 五 人 定 正 從 柴 浦 走 餘 件 轎 子 小 川 前 面 卸
 整 正 知 然 現 大 角 門 敵 援 兵 來 主 君 守
 守 如 且 轎 子 乘 是 計 守 思 躬 方 林 示 敵 數 果 且
 且 射 落 定 正 的 雜 兵 持 不 漏 直 趕 原 折 落 點 与 七 有
 種 敵 敗 北 精 船 定 正 去 向 渡 攻 戰 後 類 敵 捕 不 定 正 趕
 料 遺 遺 又 大 阪 野 智 德 社 介 小 文 吾 們 共 侶 西 林 樹 原 根 料
 助 劍 綠 由 初 昨 湯 嶋 社 頭 守 如 密 談 道 節 偷 聞 不 思 議
 及 道 節 竹 君 父 仇 定 正 敵 欲 隊 配 又 大 村 大 角 禮 度

同因果の天士なるを都て送る知るとして感嘆の外多し。鈴の茂林の東方に當りて迫る國の聲も
 なる。原米大山の討てし。辛子の城内より加勢の士卒とせしを、躬方と雌雄を争ふ。卒然と共
 侶も出てかど殺せんと。三人連立て来りける程、躬方の戦ひ勝利を以て道節、現八角門の北を
 其首を存し、且五十子の城を討つ。大将の管領の家臣ありて、定正がく、多勢を以て出陣は為体
 其戦ひの光景、地方の浦人なるを、知ると。俱に逃る。逃る敵と逐る。躬方の逆を、意を、未だ折
 躬方の雜兵も、さうさう。威の地方を取合ひ、今程、道節有種、門、定正援の兵、ゆゑ、走り、つゝ、又
 去る。那里に留り、敵ありと。現八角が報を、以て、送、恨、不堪、を、中、道、節、怒、れる、聲、高、を、信
 奴們、何なるの、さう、ん、快、謝、散ら、て、定、正、捕、を、逃、し、七、趕、菟、よ、と、罵、り、泥、障、を、蹴、立、て、馬、を、找、へ、し、り
 んと。現八角、俱、小、林、め、て、喘、り、あ、ま、大、山、王、數、も、漏、れ、天、之、命、を、那、果、和、を、敵、の、頭、人、を、豫、る、名、を、
 傳、せ、る。河、鯉、守、如、る、よ、う、小、幡、の、文、字、を、分、明、に、且、戰、の、場、小、臨、を、轆、子、を、ち、兼、る、を、其、書、策、
 知、る、を、找、む、時、宜、し、も、死、の、と、言、世、亦、と、く、諫、を、道、節、聽、か、頭、を、掉、て、を、以、て、を、さ、る、を、非、除、

守如きれば、そ、こ、お、怕、る、と、あ、る、ん、が、那、轆、子、と、早、サ、の、昔、蜀、漢、の、趙、雲、が、躬、方、の、小、勢、を、慌、て、を、喝、が、を
 廣、く、城、門、を、推、用、で、魏、の、大、軍、を、退、け、る、計、策、を、似、て、し、る、時、の、必、失、ふ、が、其、首、放、き、を、と、敢、圍、け、る、
 現八角、い、へ、ゆ、と、莊、介、と、小、文、吾、も、俱、小、道、節、と、推、林、め、て、云、云、と、諫、る、程、小、毛、野、も、亦、道、節、が、馬、の
 邊、邊、を、找、せ、り、と、喃、大、山、主、小、弟、は、是、大、阪、毛、野、胤、智、之、昨、日、湯、嶋、の、社、頭、を、料、長、對、面、を、れ、る、送、り、
 認、る、折、折、と、傍、の、人、の、あ、り、を、和、殿、を、ん、と、猜、し、る、名、を、も、遂、に、別、れ、お、れ、る、に、那、折、河、鯉、氏、を、我、が
 密、談、を、偷、聞、せ、ら、れ、て、和、殿、の、ま、の、餘、も、諸、大、士、の、帮、助、を、も、て、父、の、仇、を、殺、さ、る、身、の、故、を、萬、謝、も、又、何、を、足、
 我、の、ま、の、と、和、殿、の、亦、君、父、の、仇、定、正、主、を、殺、さ、ん、と、せ、れ、軍、界、精、妙、思、ひ、の、隨、小、敵、を、屠、り、て、勢、ひ、を、及、
 び、る、支、皆、皆、意、表、を、お、さ、る、と、さ、る、感、を、お、あ、ま、り、あ、り、あ、る、あ、れ、も、つ、ら、く、と、支、情、を、思、ひ、る、小、我、復、讎、の、
 便宜、の、ゆ、え、和、殿、の、折、を、お、さ、る、ゆ、え、河、鯉、氏、が、主、の、側、を、奸、佞、龍、山、縁、連、們、を、除、ん、と、を、相、計、ひ、た、は、
 その、孤、忠、を、お、さ、れ、我、們、の、德、を、と、せ、せ、小、弟、の、始、も、和、殿、の、軍、議、を、知、ら、ぬ、と、も、倘、和、殿、と、共、侶、
 定、正、主、を、殺、さ、走、ら、る、河、鯉、氏、を、給、て、不、忠、の、人、と、さ、る、を、似、る、然、と、小、弟、亦、亦、和、殿、の、戰、ひ、の、期、

遠く馬より内り下立て二個の雑兵を捉て毛野と俱に遠方の岸に離れて名告り。佐太郎孝嗣
 と對面を當下孝嗣阿容る色を毛野道節們より對して小子尚弱冠の身も省き親代を豪
 傑們と今回答ふ及至。敢て求ふも争何ぞ權位。今朝より猛木胸痛の病着あり行歩
 辭舌不如意れば。則轎子に扶乗して昇り俱と來る言空り。今此隱き由も皆
 親の中心信他お異るれ。當り君夫人解虫目前の内命を當奉。當家の與大毒虫也。君を
 困る言。那縁連們的奸人を入り除くと思。昨日湯嶋の社頭で料。大坂氏の義侠劇
 孟判荷。勝れる家傑も。知覺と情々地は胸臆。諦。那縁連們を較果。果されけ。便
 宜と相譚。いふ豈思んや縁連。大坂氏。親の仇。異議も。美引。は
 支の頭。未の子も親の密語。知。今諒。演。要。我親の忠謀果
 きてる圖。中。大坂氏。借。君。與。毒。除。我君。縁連。罷
 任の惑。醒。報。奴。大坂氏。擲。捕。士。百餘名。率。

猛可不出馬の準備あり。親の竊の故馬。馬。以て。小利害。演。連。諫。直。君。侯。侯。終
 酷く騎馬の鎧の折檻を親守如いの病重。今。臥。轎子。在。俄。而。我。君。出。馬。の。後。敗
 軍の雜兵脱れか。支。恁。之。報。城。内。の。士。卒。駭。謀。以。快。加。勢。の。兵。を。相。罵。り。く。
 準備。折。大山。氏。の。義。兄。弟。大。塚。信。成。孝。と。言。る。勇。士。の。為。謀。り。て。五。十。五。城。を
 火。攻。せ。れ。烈。に。魔。風。を。吹。け。城。廓。灰。燼。を。け。敵。の。隊。勢。を。窮。方。に。猛。火。を。辟。易。を。て
 敷。る。の。勢。を。餘。に。卒。後。に。成。落。て。往。方。を。知。る。傳。折。我。父。胸。痛。の。臥。在。存。忽
 地。身。を。起。て。小。子。と。喚。迫。着。け。大。坂。氏。と。密。議。の。趣。簡。様。々。と。解。示。し。我。初。亂。智。義。俠。の。豪。傑
 の。思。ひ。誰。か。知。る。他。も。亦。我。君。と。仇。を。寬。重。嶋。煉。馬。の。殘。黨。を。大。山。忠。與。と。言。う。が。支。當。家。で
 我。機。密。を。忠。與。們。不。報。知。せ。俱。謀。り。然。館。の。大。支。及。て。遂。小。城。を。拔。れ。我。忠。心。の。遠。く
 不。忠。の。罪。を。縦。縁。連。們。を。除。く。と。主。君。と。敵。不。敵。を。一。枝。を。隱。木。花。の。散。角。を。研。牛。を。殺
 せ。の。鄙。語。も。方。り。然。と。て。汝。死。を。身。重。り。と。戰。場。走。る。我。君。の。危。窮。を。救。い。を。

尚又その期は遇ふ便捷を旋り胤智と刺錯て其首を死ねまうが親の過を聊補ふたかと思ふこの
 餘の首首様々々と教訓丁寧なれば小子の意をなれぬ然も親を棄置して燔死せん公まが中よ
 る轎子も扶衆せ思義の士卒千餘名と謀し令ら轎子と昇て這里小走の多て思ふがて我君の必死を
 救ひまわさる然も我親子二名の此の難兵を従て敵を防ぎて我君を後安く落しまわさると思ひ決り
 今まも只死を極め存けし和殿們も亦左右き鬼兵後れて來り大阪氏大山氏の軍議を知り初
 對面言の顔未洩して這里も守るる聊恨を釋ふ必死を不討にゆるまら大山氏いづれと我親と
 大阪氏の密談を知りて多隊配をもあらん知る統の隊兵をり七敵と掃るる間て益々多
 ら親の疑惑と承弁せん與先との一義及ぶのとわれ感する毛野も道公即胤智の答を寺を
 らし領て如右思ふる定み以る我の憶も湯嶋の社頭徘徊して那密談を偷听する折に
 て大阪といふ面を認めれども是宿因の係り所異姓の弟兄多しと思ひ合せ證もわれが復讐し趣を
 義兄弟們も告智豫毛野と相識する大田大川二人をり。悄悄地小縁連小助劍の奴們を防

せらよの便軍より我がより大阪が五十五子の城内に空をる加勢の士卒もあまら。その虚を現ひ短
 兵急な城を抜た仇を屠りて亡君亡父の向を胸の軍議と定め大塚大飼大村們俱に舊
 好の兵を従て便軍の地方小隊配ら城の虚実を現ひ小思ふは倍て造化精妙定正みらる大阪
 們を追捕へんを士卒も漫城よりゆれり。因て猛京部も易て天塚信乃小城を攻め酒家も
 大飼大村と東西立られ不意起り管領を挾きて攻撃かり思ひの依る勝軍を我定正射
 たれどもその前を兇と権兵の裏缺ぎり盛と棄て仇の命を免れし任れ大阪の。我軍
 累を知らしあらんや。他は他が難言と敷きて河鯉氏と約束を違へて我の我死を雪め忠
 と孝とを盡すもの。欲まは所各異は只恨り我馬疲れて定正を漏る。されも透さる起て敷も東
 をもあはる敵加勢の頭人肩谷の大忠臣河鯉權佐守如。寫せ小幡小衆兄弟大阪們が云云と
 議論小時の程りいけそと思ひ仇の命運も盡さるわんぞ定正走とわらる。和郎們親
 子と敷るん要す。とくまの迹を甚かてその故を。とを孝嗣らも言送る。身義の明辨那疑い

釋れども然まて不義理と違まらざる豊嶋と煉馬の人々野心より討果され獨我君とあらざる
山内の管領家も同意ありて合戦ありし和殿の只管我君とありて執念深し恨る是甚麼
と詰れ道即冷笑ひてそのつとをきし豊嶋煉馬の滅亡の時時定正の軍界をもちて巨田持資
大將も山内頭定も十葉津宮と將とて加勢の軍兵ありとも主客の勢は同じくは是
扇谷の正敵を山内の傍仇昔唐山晋の趙孟恤の魏氏韓氏と謀し合を較て智伯を滅し
あつた豫讓の知伯の仇も獨趙氏を仇と冤て韓魏との怨とせば是趙氏の正敵を韓魏を傍
仇れ我定正と仇とて山内を怨とせざるも支情の相似し和郎が知るをんやとて毛野の推
め考嗣のち對して不佞素より大山内を怨せざる趣を既し會得せられし餘談蓋し似れども
守如主の馮我を我いふて面と認る及雖も輒く較りたりわんやとて徳とありのり今も
大山の方人として居るといふ和殿の大人の對面とは是等の意味に較るも再會のり送恨多し病
臥の對面不便ともいふと許しぬと他事もいれて孝嗣の異議及ぶに慮する急後方

をうてその轎子を這方と招く雜兵をうてその轎子を拾げ川畔近く屏居り登時仇太郎孝
嗣の大阪毛野のち對して請うりの推辞なく親と這方と招げざる実病困の爲体せし
許しありとらひ軀を轎子の引戸ををり推開くと毛野道節の共侶もたれを斬守如の腹極
破り亡骸の衣裳の鮮血を深故ち思ひりた光景も毛野のゆへ道節即ちあちく什麼とせ
て小共不呆まで支問ん詞も小重時多うける登時河鯉孝嗣の落涙を振紋を喃大阪主親
自殺の計りきまの岩語ひる恨多しとれ又只我父のまらざる蟹目前も慈不奸佞人們を誅せそ
守如そのあちくをゆきして出処不定の坐敷の師と討つ馮心よりより還て敵の便宜となり
君の危窮不及せぬ刺城を攻破られし孰の路中も我君に向なる面へ一切の君不先ちて死
我言赤心後不志知せまると刀伏て果も死父と夫人の終焉を我身にとりかた
俱死すむりかゝる親の遺言直けれ蟹目前の死骸も先轎子に乗まわらせ志ある士卒を
諒く煙火紛れ後門より卒もわたり却其後不親の亡骸も火中不棄ん工の惜し不亦

のつめらう。轎子こしのつめらう。乗のりしと解して這里こゝ事ことをけり亡骸なきと我君わがの死馬うま前まへで父子ちち共とも侶りゆうの屍を曝す
 是これ切きてのります。と思おもひしるの違ちがひも約やく束そく達たつ大だい阪はん矣や。貳に萬まん心しんと知知ち初はつの恨を悔すも。
 然しかしも我わが君きみの危窮ききうと救ひまさす。是これ孝かう嗣しが功を死の後も敵の英氣えいきと折りしる親の
 忠ちゆう那な死し其その孔くう明めいが生る仲達ちゆうたつを走りせしと以もつて傳へ唐山たうざんの諺の及びしる子とての尉
 上うへが中の中もありけりの又また死しりの既すでに盡しぬれしも空果くわくも敵もも理り義ぎを賢賢けんの諸大たと力と
 交まをりの素も願ふ所也なり。思おもひしる隨に戰役せんぎやく其その親おやの遺訓いじゆんを稱ふ君辱きんじやくらぬ時ときの臣死しとの小せう聖
 賢けんの教を恥ぢるもありん卒そつ這こ方かたより渡えん狄てき其その方かたより鬼らりとと雌め雄ゆうと凍ね詞雄ゆうと
 志しを死と急と忠と孝と歎鳴なの日本にっぽん魂たま深ふかに那親おやととあの子この宜可い惜しやく後ご生せいと今敷いま果はと何
 其その健けん氣きを死と愛と毛野の道みち節せつに倒れ怯れるあの望のぞみかぬ戦ひを推おして去さるんが死
 感かん嘆たんの外をけりの段だんの事を書きしるも楮かみ數かずを定限じやうれんを卷と更て這次こ解かい分ぶんと聽ぬか。
 南總里見八犬傳第九輯卷之一終

九編六中角

一

松野

勝春院

